2026年2月7日（土）山陽新聞　[全県版]

岡山支援センター

高校・大学生ボランティア養成

こども食堂に若い力を

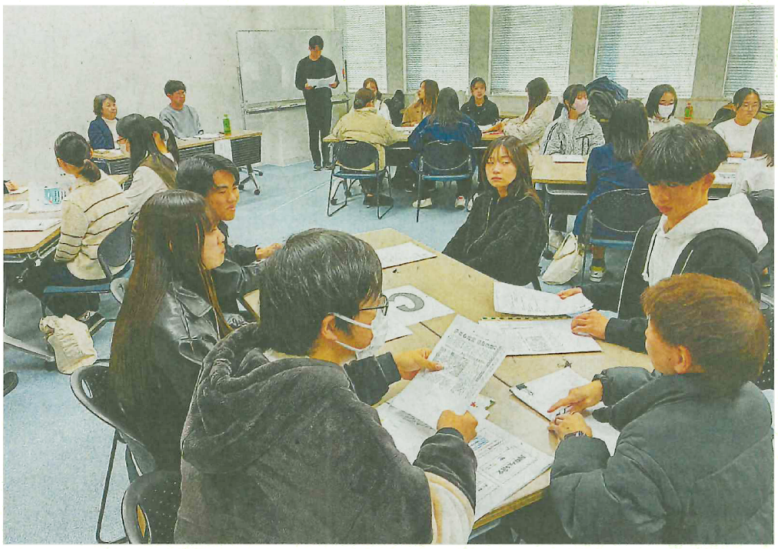
一般社団法人岡山こども食堂支援センター（倉敷市）は、岡山県内のこども食堂の運営を支える高校生・大学生ボランティアの養成に乗り出した。食を通じた地域交流拠点が県内で約150カ所に増えたとされる中、若い世代の力を集める狙いだ。14日に倉敷市で２回目の研修会を開く。（井上建吾）

「食事に困っている子が身近にいることを知ったのがきっかけ。同じ志のスタッフが集まり、地域の子どもを見守っている」。岡山支援センターが１月18日、県立図書館（岡山市北区）で開いた初のボランティア研修会。高校生、大学生20人を前に「うのっこ食堂」運営委員会の杉本美緒会長（68）が説明した。

身近な存在

宇野小（同市中区）内のコミュニティハウスで月２回、児童約20人が訪れ、手作りの夕食を囲んで交流する。２０１６年に始めて10年となる中、スタッフ約20人は50～80代に。作業がきつく感じることもあり、「片付けだけでも手伝ってくれると助かる。お兄さん、お姉さんがいると子どもたちは目を輝かせる」と呼びかけた。

「岡輝みんな食堂」の圓山典洋代表（51）も活動を紹介した。介護福祉士や医師、司法書士、菓子店主ら運営メンバーが17年にスタート。同市北区岡輝学区の高齢者施設などを会場に月１回開催。多世代の60～80人が集まり、ボランティアを含め約20人で切り盛りする。圓山さんは「料理が苦手でも周りの人が教えてくれる。趣味の話題で盛り上げるなど得意分野が生かせる。仲間を誘って継続して参加してほしい」と求めた。



研修会でこども食堂について話し合う学生たち＝１月18日、岡山県立図書館

14日、倉敷で研修会　オンラインも

学生たちは意見や質問を出し合い、理解を深めた。高校１年貞近優太さん（16）＝同市北区＝は「大切な地域活動。多くの人に身近な存在になってほしい。そのために自分もボランティアをしたい」と思いを語った。

人手不足

こども食堂は、県内では15年ごろから広がり始めた。認定ＮＰＯ法人全国こども食堂支援センター・むすびえ（東京）の25年度調査では１４６カ所。24年度より37カ所増え、増加率は全国３位という。

拡大の一方、人手不足に悩む運営者は多く、岡山支援センターは県の委託を受け、研修会を企画。ボランティア希望者とこども食堂のマッチングもしており、直島克樹代表理事（川崎医療福祉大講師）は「人材面からも持続可能な活動にしていきたい」と話す。

２回目の研修会は14日午前10時半から、天満屋倉敷店（倉敷市）の６階バンケットルームで。オンラインでも参加できる。問い合わせは岡山支援センターのメール（okayama.koiren@gmail.com）。

ズーム　こども食堂　むすびえによると、子どもが一人でも行ける無料または低額の食堂。民間発の取り組みで2012年、東京で始まったとされる。25年度調査では全国に１万2601カ所。運営者アンケートでは「困りごと（複数回答）」として、「資金不足」（47.2％）「スタッフ・ボランティア不足」（42.2％）「後継者不足」（32.3％）などが上位を占めた。